

# 平成 31 年度（1 期） 入学試験問題（第 1 日）

## 国語総合・現代文 B

（時間 60 分 配点 150 点）

### 受験上の注意事項

- 【1】 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
- 【2】 受験票、解答用紙（OCR・記述）及び机上の受験番号シールに印刷された受験番号及び氏名が間違っていたら、速やかに監督者に知らせなさい。
- 【3】 この問題冊子は、本文が 20 ページあります。  
問題冊子の印刷が不鮮明であったり、ページが落丁・乱丁していたり、解答用紙（OCR・記述）に汚れ等がある場合には、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 【4】 机上には受験票・筆記用具及び時計等監督者から指示された物以外は置いてはいけません。
- 【5】 監督者の指示があるまで退室はできません。
- 【6】 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。
- 【7】 OCR 解答用紙はコンピュータで直接読み取るので、特に次の点に留意しなさい。
  - ① 記入には HB の鉛筆またはシャープペンシル（0.5mm）を使用しなさい。
  - ② 解答用紙の **記入例** を参照して丁寧に記入しなさい。乱雑に記入したものは不利になります。
  - ③ 折り曲げたり、汚したりしてはいけません。
  - ④ 解答用紙には、答案に関係のない語句・記号を書いたり、落書きをしてはいけません。  
（問題冊子には書き込んでもよい。）
  - ⑤ 誤って記入した場合は、消しゴムできれいに消して書き直しなさい。
  - ⑥ 解答が一桁の場合には右詰めで記入しなさい。（次の例を参照しなさい。）

[例] 解答番号①の解答が 4 である場合  
解答番号②の解答が 12 である場合

解答番号	1	2	
解答欄	8 4	1 2	

↑ 左側をあける

### 注意

特に間違えやすい記入例

正 誤

1 1 1

これらは 7 と判断する恐れがあるので特に注意しなさい。



## 国語総合・現代文B

— 次の文章を読んで、後の問(問一～問五)に答えよ。

日本人は「場」という概念(ある基準で境界を定義された集団に時間的観念を入れたもの)をよく使う。その「場」において文脈が形成される。この文脈は「場」ごとに形成されるが、「場」と「場」の文脈に一貫性は必要とされない。後述するが、これが、日本人の論理性に影響を与えている。

「場を外す」とは、その場<sup>Ⅱ</sup>一時的集団で共有されている文脈からの逸脱であり、「場をしのぐ」とはその逆に、どうかその「場」を支配している文脈から逸脱しないように努力することである。この意味で、共有される「場」の文脈(暗黙の共通了解)そのものが、個人の主観性を超えて主体性(根源的自発性)をもつといってもよい。日常的な表現を使えば、「口には出さないが、その場の空気を読めよ」という暗黙の圧力である。

日常において、日本人は無意識のうちに、重層的な複数の「場」を同時並行的に行き来している。現在の「場」に誰が加わるかによって、その「場」の文脈は微妙に変化する。日本人の好きな「本音と建前」<sup>たてまえ</sup>をどう使い分けるかは、自分と相手がどの「場」にいるかによって、いくらでも変わってくる。「本音」とは「場のウチ」であり、「建前」とは「場のソト」である。

誰が入ってくるかによって、場の文脈が変わり、いままで使っていた述語が、微妙に変化するのを思い起こしていただきたい。これは、非常に複雑で難しい決定であるが、日本人はこれを身体的に<sup>①</sup>シユンジに行っている。述語は関係性に

よって定義される。日本語に、尊敬語、丁寧語、謙讓語という複雑な敬語が存在するのはそのためである。日本語で述語が最後に来るのも故のないことではない。

日本人は、死者との間にも関係性をもっている。人類学者の波平恵美子なみひら えみこがいうように、日本において、「死者の霊は、人が死ねば自然に生じるのではない」。遺体という言葉が示すように、死者の遺骸は、家族や血縁者に残されたものであり、その人たちによって処理されることが期待されている。依然として、多くの日本人にとっては、家族や血縁者による遺骸の処理を通じた死者儀礼によって、「生者」は「死者」へと時間をかけて移行していく（死ぬという「コト」）のであって、医者いしやの死亡診断を通して「死者」へと即座に移行する（死という「モノ」）ものではない。

この意味で、脳死を日本的な死の概念のなかに加えることは難しい。つまり、「頭」（＝理性）偏重の西欧的社会体系にあっては、医学の進歩に伴い脳死を人間の死の基準として受容するようになることは大きな問題ではない。しかし、「こころ」（＝情緒）偏重の日本の社会体系にあっては、身体の死を無視した脳死を人間の死の一元的基準と捉えることは難しいといわざるをえない。

死者の霊とは、遺体への働きかけを主とする死者儀礼を通して、生者としてのアイデンティティに代わって、死者として与えられた新たなアイデンティティのことを指すのであり、生者と死者は異なるアイデンティティを有するが、肉親や血縁者から見たただ独りの者としての一貫性は存在する。つまり、「見送った者」と「旅立った者」の間には、新しいが、生者のときと連続した関係性が構築されるのである。そうでなければ、「墓石の下の納骨室の故人の骨壺こつぽのそばに携帯電話を置いて、『一人で淋さびしいでしょうから』といって電話をかける」行為を理解することは難しいのではないか。

つまり、死者が死後も居つづけるとする觀念が、依然として日本人の死の觀念の中心にあるのである。「生者」は「死者」を「見送り」、「死者」は「旅立つ」。それは、死とその人間の存在が無になることではないことを意味している。他界という言葉が示すように、「死者」は「生者」と異なる空間世界に住んでおり、神によって天に召されるのではない。残った者が他界にいる死者の霊をお迎えするのである。生者と死者との関係性を前提とした「死者を想定する文化」が存在す

るのである。

この日本人特有の「関係性」偏重の心性の背後には、「モノ」と「コト」に代表される基本的な考え方に起因する感覚の違いがあるのではないかと筆者は考えている。

死者との関係性のところで、「死というモノ」と「死ぬというコト」は違うと申し上げた。ほとんどの読者の方は、この二つの言い方があらかず根源的な意味の違いを感覚的に理解しておられるだろう。少なくとも同じであるようには感じられないと思う。しかし、国語学的には、「モノ」とは、形があつて手に触れることのできる物体をはじめとして、広く出来事一般まで、人間が対象として感知・認識しうるものすべて（大野晋 他『岩波古語辞典』）と明記されており、この限りにおいて、「モノ」は「コト」を包摂した概念であり、「コト」は「モノ」の一部分でしかないことになる。かといって、日本人の日常的な言語感覚ないしは意識において、この両者は、区別されていないかというところ、そうではなく、「モノ」と「コト」の範疇はんちゆう的な区別が明確に存在している。

この区分は、日常においては、論理的ではなく感覚的なものである。すなわち、われわれ日本人は「モノ」を、主観を排除し時間的推移変動の観念を含まない、安定的かつ客観的な対象であると考ええる。一方で、「コト」とは対象と主観を分離することなく包摂し、時間的に進行する（主観が対象を通して経験する）不安定な事象である。つまり、「コト」とは、「モノ」に<sup>②</sup>カンゲンされず、結果的に「モノ」に包摂されえない独立の原義が存在するのである。

日常的に見てみると、この違いは明白である。「紅茶に砂糖が溶けていく」(A)という「時間」と「時計の上で経過する時間」という(B)の違いである。「りんごが木から落ちる」という(C)と「木から落ちるりんご」という「D」の違いである。どちらの場合も、「モノ」は、経験共有の必要性がなく、主観性を排除するがゆえに、誰にとつても同じ客観的な情報、つまり、固定的リアリティである。一方、どちらの「コト」も、対象との経験共有が前提であり、主観性を排除することはできない。ゆえに、「E」は誰にとつても等価な客観的情報ではありえない、変動的なアクチュアリティ(注1)なのである。

前述の「死というモノ」と「死ぬというコト」でこの違いを考えてみよう。「死というモノ」を客観視することはできないが、「死ぬというコト」を客観として捉えることは難しいはずである。「死ぬというコト」においては、死に逝くもの自分との共有経験（相互主体性）が必要なものであり、このアクチュアルな固有性のゆえに、「死ぬというコト」を誰にでもわかるように客観化することはできない。逆に、誰にでもわかってもらっては困る、つまり、客観化できるほど軽いことではない、と多くの日本人は認識しているはずである。日本において臓器移植は、総論（建前）の領域であり、死の判定は、各論（本音）の世界にあるといえよう。この意味で、日本における臓器移植の問題は根が深いといわねばならない。

このように日本人の世界観の成り立ちが、主客を分化せず、客観的に対象化せず、距離のない「コト」中心であることを、われわれ日本人は十分に認識しておく必要がある。一方で西欧人は、あらゆるものを客観的な対象物、つまり「モノ」として、中心に位置する自分との距離を通して把握しようとするのである。日本人の日常的な考え方が、西欧の<sup>③</sup>「モノ」<sup>ク</sup>にあるという事実は大きい。

たしかに、ニュートンがりんごが落ちるのを見て、「木から落ちるりんご」という「F」ではなく「りんごが木から落ちる（G）」と捉えたら、重力の発見はなかったかもしれない。自者の外部にあるものすべてを客観物である「H」として把握し、管理対象とするところに、近代科学の根源とその発展があることは事実である。しかし、それをもって、日本人も「コト」から「モノ」思考へと転換すべきであるという論は、言語を理解しない、非現実的なものである。

この「モノ」と「コト」を言語構造的に見てみると、「モノ」とは、名詞化することであり、名詞化することによって初めて客観化が可能となり、管理が可能となる。だから「モノ」は目に見えるものであり、言語によって厳密に定義されなければならない。一方、「コト」とは、動詞（述語）によって、時間的に進行する主客未分化の複雑な関係性を（述語を用いて）叙述することである。時間や状況から切り離して、目に見えるように提示し、言語によって厳密に定義することは不可能であり、第三者との共通理解を無条件に想定することはできない。

偶然というべきか、当然というべきか、印欧語は名詞言語であり、日本語は、明らかな動詞（述語）言語である。<sup>(注2)</sup> 中国語も、じつは、印欧語と同様に名詞言語的な性格が強い。

それゆえに、言葉（名詞）であらわせないもの、目に見えないものを排除しようとする欧米と正反対に、名詞化をしない日本人は、「」と考える傾向が強くなるのである。

おがさわらやすし  
（小笠原泰 著『なんとなく、日本人』PHP研究所  
に基づく）

（注） 1 アクチュアリテイ……現実。事実。

2 印欧語……英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語など、インド・ヨーロッパ語族に属する言葉。

問一 傍線部①～③のカタカナを漢字に直し、【記述解答用紙】に記入せよ。解答番号は、①〈1〉・②〈2〉・③〈3〉

問二 波線部「日本における臓器移植の問題は根が深いといわねばならない」について、筆者がこのように考えるのはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選び、【OCR解答用紙】にその番号を記入せよ。

解答番号は、

1

1 臓器移植の前提となる脳死判定は、家族や血縁者によって執り行われる死者儀礼を通して「生者」は「死者」へと移行するのだとする日本的な死の概念とは相容れないものであるため。

2 日本では、建前の部分では脳死を人の死とする考え方に賛成しても、本音の部分では臓器移植に反対する人が多いため。

3 日本人は無意識のうちに重層的な複数の「場」を同時並行的に行き来しており、「場のウチ」である「本音」と「場のソト」である「建前」の使い分けが微妙に変化するため。

4 日本人にとって「死ぬというコト」は誰にとっても等価な客観的情報ではなく、死に逝くものと残されるものとの共有経験（相互主体性）が必要な固定的アクチュアリテイであるため。

問三 空欄 A ～ H には、「コト」もしくは「モノ」のいずれかが入る。その組み合わせとして最も適切なものを、

次の1～4の中から一つ選び、【OCR解答用紙】にその番号を記入せよ。解答番号は、2

- |   |   |    |   |    |   |    |   |    |   |    |   |    |   |    |   |    |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 1 | A | モノ | B | コト | C | モノ | D | コト | E | モノ | F | コト | G | モノ | H | コト |
| 2 | A | コト | B | モノ | C | コト | D | モノ | E | コト | F | モノ | G | コト | H | モノ |
| 3 | A | コト | B | モノ | C | コト | D | モノ | E | モノ | F | モノ | G | コト | H | モノ |
| 4 | A | モノ | B | コト | C | コト | D | モノ | E | コト | F | モノ | G | コト | H | モノ |



問四 空欄 1 に入る語句として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選び、【OCR解答用紙】にその番号を記

入せよ。解答番号は、

3

- 1 言葉はすべての根本であり、目に見えないものを可視化するのが言葉である
- 2 目に見えないものと言葉との関係性がすべてである
- 3 目に見えるものはすべて言葉によって定義され、客観視されなくてはならない
- 4 言葉はすべてではないし、目に見えるものがすべてではない

問五 本文の内容と合致するものを、次の1～6の中から二つ選び、【OCR解答用紙】にその番号を記入せよ。順序は問

わない。解答番号は、

4

・

5

- 1 西欧人は、自分の外部にある対象を主観的な「モノ」として把握し、管理しようとする。
- 2 日本人の思考法をより論理的なものにするためには、世界観を「コト」中心から「モノ」中心へと転換させたほうがよい。
- 3 日本人は、対象と主観を分離することなく包摂する「コト」を中心に物事を捉える傾向がある。
- 4 印欧語は、対象を言語によって厳密に定義することを重視する「コト」中心の名詞言語である。
- 5 日本語では生者と死者の間にある関係性によって定義される述語が文の最後に来るが、これは話者が「場」に誰が入ってくるかによって人間関係を即座に把握してから敬語を選ぶまでの時間を必要とするためである。
- 6 日本語は、主体と客体が一体となって時間的に推移する関係性を動詞(述語)によって叙述することに重きを置く言語である。

二 次の記事を読んで、後の問(問一～問六)に答えよ。

現代人が、過去の人類とはくらべものにならないくらい豊かで快適な生活を送ることができるのは、<sup>ア</sup>高度に発達した科学技術がもたらす巨大な生産力のおかげである。その科学技術(テクノロジ)は、古代ギリシア人たちが<sup>あ</sup>相容れないものと考えていた技術(テクネ)と学問(ロゴス)が、近代になって結合することによって成立した。

なぜ両者を相容れないと考えていたのかといえば、テクネは実用をめざす職人の仕事であるのに対し、ロゴスはひたすら知的関心の満足をめざす<sup>①</sup>ユウカンカイキュウの遊戯だったからである。たしかに物理学、天文学、化学、生物学など、科学の多くは実用の利なんてまったく眼中にない好学の士によって発展を遂げてきた。

ところが近代になって、それを実用的な技術に応用する試みが始まるやいなや、技術、つまりテクノロジは猛烈な勢いで発達しはじめ、いまもどんどん加速しながら<sup>ばくしん</sup>驕進しつづけている。目先の実益を追い求める技術そのものよりも、むしろ目先の実益に無関心な学問の方がはるかに大きな実益をもたらしたという、まさしく「無用の用」の逆説である。

テクノロジのベースになっている種々の自然科学では、ほとんど例外なく数学が駆使されるが、一見何の役にも立ちそうもない、じつさい囲碁や将棋とおなじような知的遊戯として発展してきた数学が、現代の巨大な生産力の中核をなしていることを考えると、「無用の用」の思いをますます深くするのである。

とはいうものの、文明発展の原動力となってきたのは究極のところ、少しでも豊かに、少しでも快適に暮らしたいという、人類のいつに変わらぬ願望であつたろう。少しでも便利にしたい、少しでも楽にやりたい、あるいは少しでも多く食べたいといった願望が、さまざまな工夫や発明や発見を生み、その蓄積が文明を形成してきたわけである。この意味で「必要は発明の母である」は文明発展の基本原理である。

ところが、テクノロジの発展によって可能になった巨大な生産力をバネにして資本主義が爆発的に前進し、高度消費社会とよばれる段階に達するころ(日本だと一九八〇年あたり)から事態は逆転し、「必要は発明の母」ではなく、むしろ

る。「<sup>イ</sup>発明は必要の母」が資本主義や社会発展の基本原理になってきた。

資本主義が成長してくる土壌となった市場は、もともと食物や衣類のような、人間が生きていくのに欠かせない生活必需品を交換する場であった。ひとたび出現するや、資本主義は市場における商品の交換を活性化することによって、テクノロジーの発展がもたらす物質的恩恵を広く社会にゆきわたらせるとともに、その結果生じる消費財への需要の拡大によってテクノロジーの発展をうながす。このように、市場とテクノロジーの発達を媒介する重要な機能を資本主義が果たすことで、ようやく多くの社会は飢餓に脅かされることのない生産力という人類古来の悲願を達成した。つまり最低限の生活必需品を、すべての消費者が手にしたのである。

ところが、その後たちまちのうちに、この「最低限の生活必需品」の水準は急速に上昇していく。たとえば、いまの日本人でテレビや冷蔵庫などの家庭電化製品、あるいは電話やマイカーをそのうちにカウントしないひとは、あまり多くないにちがいない。なくても生きていけないことはないという意味で、ほんとうの「最低限の生活必需品」ではないけれども、それがあれば生活が格段に便利・快適になるという理由で発明・開発され、じつさいそのように使用されているこれらの消費財を、ここでは仮に「生活便利品」とよんでおこう。かつての「ぜいたく品」が「必需品」に変身したわけだ。

テクノロジーの発展が可能にした「大量生産」大量消費主義」によって、「最低限の生活必需品」水準を突破した資本主義は、そのまま「生活便利品」水準へ向かって、さらに市場を拡大していく。日本では、いわゆる高度経済成長がこの過程に該当する。おおよそ「生活便利品」水準が達成された社会は大衆消費社会などとよばれるが、これはとりもなおさず、「最低限の生活必需品」はもちろん、「生活便利品」の市場が飽和状態に達したことを意味していよう。

テクノロジーの急速な発展もあって案外早くやってきたこの飽和状態は、しかし全体としての資本主義にとってひとつの大きな危機である。なぜなら、市場の飽和とは経済成長の限界の到来、資本主義の発展の終焉しゅうえんにほかならないからである。もちろん、個々人の<sup>②</sup>リコシン、あるいは金銭的欲望の巨大な集積体である資本主義が、ここでストップするわけがない。資本主義が自らを維持・発展させようとして市場を拡大する方法は、この段階でおおよそ四つである。

第一はグローバルな市場開発。第二は、たとえば福祉、教育、遊びなど、それまで市場経済の論理とは無縁とされてきた領域の市場化。第三は、従来の市場に属する商品に高い付加価値をあたえて利潤を拡大しようとするブランド化戦略。第四は「最低限の生活必需品」どころか「生活便利品」でさえない、いわば「生活無用品」の開発による市場の拡大である。このうち、とくに第三、第四の局面が目立つようになると、資本主義社会が、大衆消費社会から高度消費社会に移行したと見るわけだが、以下においては第四の方法を詳しく論じるとしよう。「発明は必要の母」とは、まさにその基本戦略だからである。

「生活無用品」は煙草や酒をはじめとする嗜好品しこうひんのように、むかしからなかったわけではない。それらはしかし、もともと生活慣習のなかに存在していたものであつて、それを売つて利益を得るためにわざわざ開発されたものではない。現代の「生活無用品」とは、そこが決定的にちがう。

たとえば一九七九年に登場したソニーの「ウォークマン」。これはあきらかに「最低限の生活必需品」でも「生活便利品」でもなく、「生活無用品」である。ここで重要なのは、そんなものを欲しがっているひと、路上を歩きながら音楽を聴きたいと思つているひとなど、それまでの世の中にまったくいなかったということだ。それはそうだ。四六時中、音楽を聴いていなければならぬ必然性など、だれにもありはしないからである。

では、そんな需要のない商品が、なぜ開発されたのか。すでに存在しているいくつかのテクノロジーを試行的に順列組み合わせするうち、ウォークマン(注1)のコンセプトと製造技術が「発見≡発明」された、要するに「たまたまできちゃつた」のである。

しかし、ひとたびそれが商品として売られるや、それは結果として、四六時中、音楽を聴くという新しいライフスタイルの提案になつた。するとそれは、全世代のなかでもっとも音楽への関心が高く、いつの時代も「どんなものでもいい、新しいライフスタイルを」と望んでいる若者たちの潜在的欲求に、はなはだよく応える商品となつたのである。

そして、これは若者に限つたことではないが、「欲望のモホウセイ」<sup>③</sup>といつて、必要性の有無に関係なく、人間は他

人の多くが所有しているものが欲しくなるようになってきていて、そうになると、それがどうしても必要なもののように錯覚されてくる。ここまでくると、「たまたまできちゃった」発明品にすぎなかったものが、「どうしても必要なもの」として感じられるようになる。つまりは、「発明は必要の母」なのである。

ウォークマンの場合、最初カセットテープに始まり、その後、CD、MD、フラッシュメモリーと、テクノロジーの進化にともなうメディアの Paradigm・チェンジが目まぐるしいスピードで生起し、その都度いわば「買い替え市場」が生じてきた。それにしても、一生かかっても絶対聴くことのできないような膨大な数の曲を記憶できる器械に、いったいどんな必要があるのだろうか。

さて、ウォークマンやデジタルカメラとおなじように、「発明が必要の母」となった「X」でも、時を追って「生活必需品」化してくるものがある。ケータイやパソコンはその典型であろう。ウォークマンやデジタルカメラはあくまで個人向けツールなので、関心がなければ購入する必要性はまったくなく、その意味で消費者にかかる「購入圧」はそれほど高くないが、複数の人間相互のコミュニケーション・ツールとなるケータイやパソコンの場合は、そうはいかない。

なぜなら、これら「生活無用品」を「必需品」とするライフスタイルを採用する消費者がしだいに増え、社会的多数派になってくると、それらをあくまで「無用品」と考えるひとびとが、コミュニケーションの輪から疎外されがちになるからである。その結果、それを避けるために、ある種の強制力をともなった購入圧が生じてくる。その時点で「無用品」は、立派な「必需品」に転化するのである。

資本主義という経済システムにおける、もつともミクロな単位は商品に対する消費者の欲望である。企業がいくら商品を生産しても、それを買おうとする欲望が消費者に起きなければ商売は成り立たない。人類史の大半は「最低限の生活必需品」さえ充足できない生産水準にあったが、その段階では商品への欲望はいわば自生していた。テクノロジーの発展により、その欲望が充足されたあとに出現した大衆消費社会にあっても、商品への欲望は未だ自生的なものの延長にあったということが出来る。

ところが、さらなるテクノロジーの発展の結果、その欲望が充足されるようになると、資本主義は生き残るために欲望そのものを新たに開発しなければならなくなった。そこで考えられたのが、さまざまなジャンルのテクノロジーを順列組み合わせたに應用することによって「無用品」を次から次へと発明し、マスメディアを中心とする種々の媒体を利用して、それらをあたかも「必需品」であるかのように消費者に錯視させ、また場合によっては強い購入圧をかけて欲望を喚起するという道であった。かくして、「必要だから発明された」のではなく、「発明されたので必要になった」という「倒錯した逆説的論理」が資本主義の生存戦略となっているのである。

(森下伸也著『逆説思考 自分の「頭」をどう疑うか』光文社新書)

に基づく)

- (注)
- 1 コンセプト……作品や商品の全体に貫かれた骨格となる発想や観点。
  - 2 MD……ミニディスク。一九九〇年代に発売された記録媒体。
  - 3 パラダイム・チェンジ……それまで支配的だった物の考え方・認識の枠組みが一変すること。

問一 傍線部ア「高度に発達した科学技術」とあるが、どのような技術なのか。それを説明するものとして最も適切なものを次の1～4の中から一つ選び、【OCR解答用紙】にその番号を記入せよ。解答番号は、6

- 1 役に立つようにみえてまったく役に立たない「無用の用」ともいうべき技術。
- 2 富裕層を中心に、さらなる富の獲得を目的として開発が進められてきた学術的な技術。
- 3 知的好奇心から生まれた学問としての知識を、実際に応用するなかで発展した技術。
- 4 職人や熟練工が何世代にもわたって脈々と受け継ぎ、改良を加え進化させてきた技術。

問二 傍線部①～③のカタカナを漢字に直し、【記述解答用紙】に記入せよ。解答番号は、①〈4〉・②〈5〉・③〈6〉

問三 傍線部イ「『発明は必要の母』が資本主義や社会発展の基本原理になってきた」とあるが、それを説明するものとし

て最も適切なものを次の1～4の中から一つ選び、【OCR解答用紙】にその番号を記入せよ。解答番号は、7

1 テクノロジーが発展した結果、人々は生きるために最低限必要なモノを手に入れることができるようになり、それが人口増加という資本主義や社会の繁栄に結びついたということ。

2 人々は大量生産・大量販売の仕組みを築くことで大衆消費社会を実現し、人類がこれまでに経験したことのない新たな資本主義や社会を創り上げたということ。

3 物質的欲求に束縛されることなく、精神的欲求を満たすことの重要性に気づいたことで、人々は無駄な消費活動をやめる新たな資本主義や社会の姿を求めるようになったということ。

4 人々の間に生活便利品が普及し市場が飽和状態に達すると、必要性もなく利便性にも資さない商品を開発して消費者の欲求そのものを生み出すことで、資本主義や社会が発展してきたということ。

問四 傍線部ウ「大衆消費社会」とあるが、どのような社会なのか。それを説明するものとして最も適切なものを次の1～

4の中から一つ選び、【OCR解答用紙】にその番号を記入せよ。解答番号は、8

1 多くの人々が生命を維持するために必要な最低限のモノを、大量に得ることができる社会。

2 テクノロジーの発展を背景に、実生活には直接必要のない品までもが一般の人々に普及した社会。

3 大量生産された商品を無駄に廃棄するのではなく、自然環境保護を前提にモノを生産する循環型の社会。

4 需給バランスを考えた合理的な生産計画に基づき、効率性を高めることを追求した社会。

問五 空欄 

X
---

 に入る最も適切な言葉五文字（句読点・記号は字数に含まない）を本文の中から抜き出し、【記述解答用紙】に記入せよ。解答番号は、〈7〉

問六 本文の内容と合致するものを、次の1～6の中から二つ選び、【OCR解答用紙】にその番号を記入せよ。順序は問わない。解答番号は、

9
---

・

10
----

- 1 有史以前より、人類は技術と学問の融合は不可能であることを知っており、高度消費社会のなかでそのことが結果的に証明された。
- 2 資本主義は市場における取引を活性化させる役割を果たすとともに、市場と科学技術とのなかだちをするという機能を果たした。
- 3 先端技術の開発スピードが鈍化したことで市場に投入できる新商品の数が減ってきており、資本主義の根幹が揺るがされている。
- 4 経済発展にともなう環境破壊によって生態系のバランスが崩れたことが、大衆消費社会から高度消費社会へと社会が変貌するきっかけとなった。
- 5 高度消費社会においては、マスメディアを利用して消費者を錯覚させたり、消費者に購入圧を生じさせたりすることで、必要性もなく利便性にも資さない商品の需要を生み出している。
- 6 日本においては高度経済成長期に大衆消費社会から高度消費社会への移行がみられたが、その過程においても新たな商品に対する消費者の欲望は自生的なものであった。



三 次の各問（問一～問八）を読んで、それぞれの指示に従って答えよ。

問一 次のA～Dの各群において、傍線部の漢字が正しいものはどれか。1～4の中からそれぞれ一つずつ選び、【OCR

解答用紙】にその番号を記入せよ。解答番号は、A  ・ B  ・ C  ・ D

- A
- 1 遺跡の発掘現場で、意匠を凝らした装飾品が発見された。
  - 2 公園で財布を取得したので交番に届けに行くところだ。
  - 3 顧客からの問い合わせには誠意ある解答を心がけている。
  - 4 政府は予算案の修整に応じる構えだ。

- B
- 1 彼の堂々とした立ち居振る舞いは、集まった人たちの中で一際異才を放っていた。
  - 2 高齢者を対象とした健康講座が開催された。
  - 3 上司の歓心を買うために至れり尽くせりのことをした。
  - 4 両チームの力は拮抗していて、明日の試合の勝敗は皆目検討がつかない。

- C
- 1 民主主義社会で大切なことの一つは、言論の自由が要護されることだ。
  - 2 世界平和の実現のために、多くの国が核廃絶を提章している。
  - 3 科学と哲学は、どちらも重要な人間の知的営為である。
  - 4 会員の努力と協力によって、当クラブは初期の目的を達することができた。

- D
- |   |   |
|---|---|
| 1 | あの山は頂上からの <u>眺望</u> がすばらしいことで有名だ。         |
| 2 | 常にこつこつと努力を続ける <u>勤勉</u> さが彼の <u>性情</u> だ。 |
| 3 | 私の兄は若いころからブランド <u>試行</u> の強い人間だった。        |
| 4 | 十年前の親善試合が両校の友好関係の <u>端緒</u> となった。         |

問二 次のA～Dの各群において、漢字の読み方(カタカナ表記)が正しくないものはどれか。1～4の中からそれぞれ一つずつ選び、【OCR解答用紙】にその番号を記入せよ。解答番号は、A  ・ B  ・ C  ・ D

- A
- |   |         |
|---|---------|
| 1 | 賄(ハカラ)う |
| 2 | 酌(ク)む   |
| 3 | 擦(ス)る   |
| 4 | 潜(ヒソ)む  |

- B
- |   |          |
|---|----------|
| 1 | 襟足(エリアシ) |
| 2 | 版図(ハンズ)  |
| 3 | 疾病(シツペイ) |
| 4 | 明察(メイサツ) |

- C
- |   |            |
|---|------------|
| 1 | 定礎(ジヨウソ)   |
| 2 | 門扉(モンピ)    |
| 3 | 遵守(ジュンシュ)  |
| 4 | 掌中(シヨウチュウ) |

- D
- |   |         |
|---|---------|
| 1 | 諭旨(ユシ)  |
| 2 | 敷設(フセツ) |
| 3 | 身重(ミオモ) |
| 4 | 知己(チミ)  |

問三 次のA～Dの  に入る最も適切な語を、1～4の中からそれぞれ一つずつ選び、【OCR解答用紙】にその番号を記入せよ。解答番号は、A  ・ B  ・ C  ・ D

A 下町の小さな町工場であっても、特定分野では他の [ ] を許さない技術力を持っている。

- 1 追従
- 2 追尾
- 3 追隨
- 4 追及

B 変化の激しい時代においては、旧態 [ ] とした経営方法では今後の成長は難しい。

- 1 以前
- 2 已然
- 3 依然
- 4 依前

C ここから二時間ほど山道を行くと、水が [ ] と湧き出る場所がある。

- 1 しんしん
- 2 らんらん
- 3 さんさん
- 4 こんこん

D [ ] とうなだれる彼女に、かける言葉が見つからなかった。

- 1 婉然えんぜん
- 2 悄然しょうぜん
- 3 陶然
- 4 肅然

問四

次のA～Cの二つの言葉の関係と最も近い関係になる組み合わせを、1～4の中からそれぞれ一つずつ選び、【OC  
R 解答用紙】にその番号を記入せよ。解答番号は、A [23] ・ B [24] ・ C [25]

A 委細 — 詳細

- 1 着工 — 開館
- 2 受賞 — 授賞
- 3 出発 — 到着
- 4 提供 — 供与

B 高尚 — 卑俗

- 1 失礼 — 非礼
- 2 維持 — 創設
- 3 強硬 — 軟弱
- 4 我慢 — 辛抱

C 雑誌 — 週刊誌

- 1 梅雨 — 五月雨
- 2 抗弁 — 強弁
- 3 惑星 — 地球
- 4 農業 — 林業

問五 次のA・Bにおいて、例文の傍線部の語と最も近い意味・用法のものを、1～4の中からそれぞれ一つずつ選び、【O

CR解答用紙】にその番号を記入せよ。解答番号は、A 26・B 27

A 例 二度と過ちは犯すまいと心に固く誓った。

- 1 そんな計画はとても実行できまいと誰もが考えていた。
- 2 もう子どもでもあるまいし、軽はずみな行為は慎んでもらいたい。
- 3 大事なのはこれからのことなので、過去は問うまい。
- 4 今回のプランは、一般の人々にはとうてい理解されまい。

B 例 彼は、もう少しのところで事故に遭うところだった。

- 1 相次ぐ不祥事に、もうあきれはてて物も言えない。
- 2 ごちそうをたくさんいただいたので、もう何も食べられない。
- 3 長い間離れてしまったので、故郷のことは、もうはつきりとは覚えていない。
- 4 計画はほぼ完成しているのだが、何かもう一つ物足りない気がする。

問六 次のA・Bの傍線部の語句の意味として最も適切なものを、1～4の中からそれぞれ一つずつ選び、【OCR解答用紙】

にその番号を記入せよ。解答番号は、A 28・B 29

A 課長という職は彼には役不足だ。

- 1 役割が曖昧であること。
- 2 役目が重すぎること。
- 3 能力が足りないこと。
- 4 役目が軽すぎること。

B 私の報告を聞いて、彼は慚然おげんとしてため息をついた。

- 1 怒っている様子。
- 2 落胆している様子。
- 3 物思いに沈んでいる様子。
- 4 感謝している様子。

問七

次のA・Bの語句の使い方として最も適切なものを、1～4の中からそれぞれ一つずつ選び、【OCR解答用紙】にその番号を記入せよ。解答番号は、A 30・B 31

A 蛇足

- 1 彼は一見のんびりしているように見えるが、意外と蛇足へいれないで侮れない。
- 2 一切リスクがない投資だという彼の話は、現実味がなくてまるで蛇足へいれなをつかむようだ。
- 3 その映画の取って付けたようなエピソードは、蛇足へいれなだった。
- 4 いつも穏やかで優しい彼だが、あえて蛇足へいれなを挙げるとすれば、それは積極性だ。

B 虎の子

- 1 あの場面ですしも動揺しないなんて、本当に虎の子こを持った方ですね。
- 2 私の虎の子こは、ビジネスシーンでも十分に通用する英語力です。
- 3 こうすれば成功するという虎の子こがあるなら、教えてほしいくらいだ。
- 4 近所の家に空き巣が入り、おばあさんの虎の子この金が盗まれたそうだ。

問八 次のA～Dの  に入る最も適切な語を、後の1～8の中からそれぞれ一つずつ選び、【OCR解答用紙】にその

番号を記入せよ。ただし、同じものを繰り返し使用してはならない。

解答番号は、A 32・ B 33・ C 34・ D 35

A 愁眉を  B 物議を  C 弁明に  D 旧交を

- |   |     |   |    |   |    |   |     |
|---|-----|---|----|---|----|---|-----|
| 1 | 取る  | 2 | 付す | 3 | 醸す | 4 | 開く  |
| 5 | 努める | 6 | 崩す | 7 | 砕く | 8 | 温める |

〔国語の問題は以上です。〕



